

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00570

研究課題名(和文)非中国語圏で成立した最早期のプロテスタント系漢訳聖書の訳語・文体形成に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Formation of Terms and Styles in the Chinese Bible by Protestant Missionaries in the Early 19th Century of India

研究代表者

永井 崇弘(NAGAI, Takahiro)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(総合グローバル)・教授

研究者番号：80313724

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文):本研究課題に関連する研究成果は、図書1冊、論文10篇、口頭発表11回であり、その領域も版本、語彙、文法とラサール系漢訳聖書の訳文の全体像を理解するために必要な研究成果が網羅されている。特に研究代表者と研究分担者の共著書『ラサール訳『福音書』の口訳と挑菩薩之語』-研究と影印・翻刻-』(2021年、株式会社あるむ)を通して、英国ロンドンのランベス・パレス図書館で発見した最早期のラサール訳本の影印・翻刻とその翻訳背景および音訳語研究の知見を社会に広く公開できたことは大きな成果である。また、本研究課題研究で電子化を行ったラサール系漢訳聖書テキストは、今後の中国語研究にとっても貴重な電子データとなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題によって非中国語圏のインドで漢訳された最早期のプロテスタント系漢訳聖書の翻訳者や翻訳背景、ゼロからの翻訳にともなう訳語・訳文と語彙・文法の変遷・影響関係の解明を行ったことは大きな学術的意義がある。また、研究成果の論文、口頭発表による公表に加えて、図書の刊行でも最早期の漢訳聖書のテキストと関連する研究成果を公表できた意義は大きい。さらに図書のロンドンのランベス・パレス図書館への寄贈を通して、国際的に同図書館の資料と本課題の研究成果を公表できたことも重要である。これに加えて、これまで未調査であったインドでの文献所蔵調査を行い、漢訳聖書等の所蔵状況を把握したことも学術的に貴重であると言える。

研究成果の概要(英文):The research results related to this research project include one book, ten articles and eleven oral presentations, covering a wide range of areas such as bibliography, vocabulary and grammar, and encompassing the research necessary to understand the whole picture of the translation of the Lassar or Lassar and Marshman's Versions of the Chinese Bible. In particular, in the book Lassar's Chinese Version of the Gospel According to St. Matthew. A Study on the Original Texts and Transliterated Words: with an Appendix of a Facsimile and the Text(2021, Arumu), we have made our findings widely available to society through the publication of the facsimile of the earliest Lassar's translation found in the Lambeth Palace Library in the UK, and the research results on its translation background and transliteration words. In addition, the Lassar's Chinese translation of biblical texts digitised in this research will be valuable electronic data for future Chinese language research.

研究分野：中国語学、東アジア文化交渉学

キーワード：プロテスタント系漢訳聖書 非中国語圏 インド ラサール マーシュマン 語彙・文法 書誌

1. 研究開始当初の背景

近代中国語研究の資料としての漢訳聖書の重要性が高まる一方、最早期のプロテスタント系漢訳聖書、特にラサール系漢訳聖書については、翻訳者の経歴や訳本成立の背景、底本、版本の種類とその系譜をはじめとする近代中国語研究に必要な基礎的な解明が行われていなかった。非中国語圏のインドで漢訳が行われたラサール系漢訳聖書は、中国で漢訳されたモリソンによる漢訳聖書とともに 19 世紀前半における二大漢訳聖書の一つであるにも関わらず、モリソンの漢訳聖書に比してあらゆる面において研究が手つかずの状態に置かれていた。そのため、ラサール系の漢訳聖書としては、一般的に知られていた 1822 年版のマーシュマン・ラサール訳の訳文が翻訳および近代中国語の資料として利用されていたが、それは表層的なものに留まらざるを得なかった。非中国語圏のインドで成立したラサール系漢訳聖書の書誌的研究および訳語・訳文の研究を行うことで、近代中国語の資料として十分に利用できる状態にすることは漢訳聖書翻訳史の研究はもとより、近代中国語研究、翻訳学といった多岐にわたる研究分野にとって喫緊の課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究課題に関する研究の目的は主に 5 つある。1 つ目は、これまで研究がほとんど行われていなかった非中国語圏のインドで漢訳されたラサール系漢訳聖書の版本の探索と発見である。19 世紀および 20 世紀に出版された目録と実地の調査によって、ラサール系漢訳聖書の種類の特定を行うとともに、訳文を入手して言語学的特徴の解明に用いる。2 つ目は、翻訳者の経歴、渡印した目的と聖書を漢訳するに至った経緯、漢訳の際に用いた底本の特定など、言語学的考察を進める大前提となる知見を得ることである。3 つ目は、本研究課題の遂行によって新たに発見したラサール系漢訳聖書の原点となるラサール訳を中心に、他の版本との比較を行いながら、語彙・文法の分析・考察を行い、各版本の言語学的特徴を明らかにすることである。4 つ目の目的は、各版本における訳文の言語学的特徴の解明に加え、ラサール系漢訳聖書の語彙・文法の特徴の通時的变化を解明し、その特徴から時期区分を行うことである。5 つ目の目的としては、ラサール系漢訳聖書における中国語の解明の手掛かりとなる近代の基督教宣教師の手による中国語文献の探索、書誌的考察、言語学的特徴の解明である。そして、これら 5 つの主要目的に基づく個別の研究成果を有機的に結び付けて、ラサール系漢訳聖書の全体像を明らかにすることも本研究課題の大きな目的である。

3. 研究の方法

研究代表者と研究分担者は文献調査を行い、ラサール系漢訳聖書および関連する近代中国語文献の探索を行う。発見した文献については、可能な限り写真撮影を行う。その一方、既に入手済みの版本については、電子テキスト化を行うことで、精密かつ計量的考察を行う状態に整える。文献調査によって新たに入手した文献については、研究代表者と研究分担者によって順次テキストの電子化を行う。蓄積した電子テキストも用いながら研究代表者は主にラサール系漢訳聖書の訳語・訳文などの直接的考察を行う。研究分担者は主にプロテスタント系宣教師による中国語著作の分析・考察といった周辺の関連研究を行い、緊密に連携してその研究成果をラサール系漢訳聖書の考察に役立てる。ラサール系漢訳聖書の考察では、各版本の訳文の電子テキストを利用して計量的観点からも精確に語彙(訳文)・文法の考察を行うとともに、翻訳時期の異なる複数の版本を比較することにより、通時的に訳語・訳文の変遷を考察する。さらに語彙や文法の通時的考察によってラサール系漢訳聖書の時期区分を確定させる。なお、ラサール、特にマーシュマンとラサールによる漢訳聖書は、中国におけるプロテスタント系初の漢訳聖書であるモリソン訳の影響を受けたとされているとともに、そのモリソン訳は 1707 年に中国で活動していたカトリック教会宣教師のバセが漢訳した『四史攷編』の影響を受けているため、ラサールおよびマーシュマン・ラサール訳を考察する際には、この両者の漢訳文も併せて参照しつつ研究を行う。

4. 研究成果

本研究課題の研究期間は当初 3 年の予定であったが、新型コロナウイルスの世界的蔓延により海外文献調査を実施することができなかったため、2 年の期間延長を行った。この研究期間の延長にともない、本研究課題に対する研究時間が増加したことで、当初想定していたよりも数多くの研究成果を広く社会に公表することができた。本研究課題に関する研究代表者および研究分担者の共著は 1 冊、両者の論文は 10 編、国際学会を含む学会等における口頭発表は 11 回と多くの成果を社会に公表することができた。特に、論文「關於 19 世紀初在印度翻譯的漢譯聖經及其譯者和底本 - 拉沙的馬太福音漢譯本 - 」(永井崇弘, 2020, 単著, 『福井大学教育・人文社会系部門紀要』第 4 号, 1 - 12 頁)では、ラサール系漢訳聖書の言語学的考察に先立って必要不可欠な翻訳者や翻訳背景、底本などの基礎的な考察を行った。この論文によって、漢訳者のラサールが従来から知られていたマカオで生まれ育ったアルメニア人で、ポルトガル人の通訳も歴任したという情報に加え、24 歳の時に紅茶貿易のためにインドのカルカッタに渡ったこと、その後

の商売の不振により、1800年に開校したウィリアム・フォート・カレッジ(Fort William College)の中国語教員となる予定であったが、カレッジの規模縮小のため取り消しとなったこと、その後セランポールで活動していたバプテスト派の英国人宣教師ブキャナンにより聖書の漢訳を依頼されるという翻訳背景が明らかとなった。また、1807年にラサールによって漢訳された『嘉音遵囑口挑菩薩之語』がブキャナンを経て、イングランド教会カンタベリー大主教に贈られ、ロンドンの大主教公邸にあるランベス・パレス図書館(Lambeth Palace Library)に収蔵されるというセランポールからロンドンへの道のりも明らかにすることができた。さらに、ラサール訳の『嘉音遵囑口挑菩薩之語』の底本について、従来が指摘されていたアルメニア語訳本に加え、英語欽定訳本も底本として用いられていたことも解明することができた。

2019年度に行った英国における文献調査では、ロンドンのランベス・パレス図書館において1807年にラサールが単独で漢訳を行った『嘉音遵囑口挑菩薩之語』の全文を写真撮影することができた。研究代表者と分担研究者による『ラサール訳『嘉音遵囑口挑菩薩之語』- 研究と影印・翻刻 -』(愛知大学国研叢書第4期第5冊)(2021, 永井崇弘・塩山正純, 共著, あるむ)では、これまで未発見であった非中国語圏のインドにおいて、参照する漢訳聖書がない状態でゼロから翻訳された最早期のプロテスタント系漢訳聖書の影印および翻刻、翻訳者と翻訳背景、訳文の最大の特徴である音訳語の考察を行った。所蔵元であるのランベス・パレス図書館の許諾を得た影印と活字化した翻刻を広く公開できた意義は非常に大きい。また本書を世界的な同図書館に寄贈することにより、本研究課題およびその研究内容をグローバルに広報することができた。

2020年度の主な研究成果としては、2020年の国際学会、東アジア文化交渉学会第12回年次大会(中国・鄭州大学・オンライン開催)での口頭発表をもとにした「關於在印度漢譯的新教早期聖經中基督教的詞語 - 1807年拉沙漢譯的《嘉音遵囑口挑菩薩之語》爲中心 -」(永井崇弘 2021, 単著, 『文化交渉と言語接触』, 東方書店, 213 - 232頁)があるが、これは語彙に関する研究成果である。この論文によって、ラサール訳『嘉音遵囑口挑菩薩之語』におけるキリスト教用語のうち、ほとんどを占める90%が意識語で、音訳語は約9%、音訳+意識に至っては約1%しかないことが確認できた。このうち、大多数を占める意識語は、そのほとんどが既存の中国語語彙から借用されたものであった。その借用先として、中国の既存の宗教用語も例外ではなかった。聖書の漢訳における土着の宗教用語の採用については、『嘉音遵囑口挑菩薩之語』以前のカトリック教会や『嘉音遵囑口挑菩薩之語』以後のプロテスタントにおけるターム問題(Term Question)に代表されるように、常に土着の宗教用語との差別化が大きな論点となり、異教の用語の採用については慎重に取り扱われた。しかし、本論文の考察によって、漢訳者であるラサールは『嘉音遵囑口挑菩薩之語』の漢訳に際し、比較的寛容に既存の宗教用語を採用していることが明らかとなった。なお、既存の中国語語彙から借用が難しい用語については、ラサールは「下水」のように新たに意識語を造語して対応していることが確認できた。音訳語については、「紗口餌啞啞」のようにギリシア語由来の訳語も見られたが、おおよそ英語欽定訳から訳出されていた。またラサール訳『嘉音遵囑口挑菩薩之語』では、少数ではあるが「音訳+意識の複合語」の訳語も見られた。この訳語は、英語訳または古典アルメニア語訳に対応させて訳出したために生じたものと「基沙王」のように「王」という意識成分を音訳成分に付加したために生じたものであった。さらに、ラサール訳『嘉音遵囑口挑菩薩之語』のキリスト教用語には、意図的とも言えるような同一語の複数表記が数多く確認できたが、これは最終的な訳語の決定と後の刊本のための訳語の候補であることを指摘することができた。このほか、この論文によって『嘉音遵囑口挑菩薩之語』におけるキリスト教用語の考察を行う際に、マタ2:1に見られる訳語「西方」とマタ24:20に見られる訳語「秋天」が、ギリシア語公認本文などと異なっていることを発見し、それらの漢訳語が誤訳によるものであることを指摘することができた。このような困難な環境において、『嘉音遵囑口挑菩薩之語』の漢訳文がインドで成立したが、そのなかのキリスト教用語の訳語は、おおよそ1810年のマーシュマン・ラサール訳の『此嘉音由囑所著』までにしか継承されなかった。ラサールが1822年にマーシュマンとともに完成させた『聖經』には、『嘉音遵囑口挑菩薩之語』で訳出したキリスト教用語の訳語は採用されず、そこでは1814年のモリソン訳『新遺詔書』とその基となるバセ訳『四史攷編』の訳語が採用されることとなったためであった。

このような語彙に関する研究成果に加えて、2020年度の研究成果である論文「關於1807年拉沙漢譯的《嘉音遵囑口挑菩薩之語》中的首見漢字」(永井崇弘, 2021, 単著, 『関西大学中国文学会紀要』第42号, 47 - 66頁)は、ラサール訳に見られる独自の新造漢字に関する研究成果である。1807年のラサール訳『嘉音遵囑口挑菩薩之語』には、その本文の電子テキスト化を行う際に、コンピュータで入力することができない漢字が存在するが、この論文では『康熙字典』(47,035字)をはじめ、『大漢和辞典』(5万余字)や『中華字海』(85,568字)、『今昔文字鏡単漢字16万字版』に収録されていない漢字を未見漢字46字の考察を行った。その結果、46字の未見漢字は口偏を伴うものと伴わないものに大別でき、口偏を伴わない漢字が8字で全体の約17%、口偏を伴う漢字が38字で全体の約83%を占めていることが解明された。口偏を伴う漢字については、すべて音訳語に使用し、すべて左側に口偏を付す構造を採用するとともに、口偏を除いた部分には基本字以外にも異体字、行草書体など書体の異なる漢字が使用されていることが明らかとなった。また、同一事物を表記する場合でも、訳語で複数種の表記が提示されているのと同様に、漢字レベルにおいても複数種の漢字を用いて表記の候補が複数あることを示していることも確認できた。さらに、これらの未見漢字は、1810年に出版された刊本のマーシュマンとラサールによる『此嘉音由囑所著』では14字の継承が確認できたが、1822年のマーシ

ユマン・ラサール訳では14字のみならず46字の未見漢字すべてが継承されることはなかった。それは1822年訳がモリソン訳の訳文に大きく依拠することとなったからであった。この論文によって、モリソン訳は1810年に「使徒行伝」が漢訳されているが、モリソン訳はマーシュマンが加わって漢訳された1810年の『此嘉音由囑嘯所著』では参照されていなかったが、1822年までのどこかの段階でマーシュマンの主導によりモリソン訳への依拠が始まったという可能性を示すことができた。

2021年度ではこれまでの書誌的研究および語彙の研究結果で得られた知見を基に、文法的観点から研究を進めた。論文「關於拉沙漢譯《嘉音遵囑口挑菩薩之語》“的”與“了”的用法」(永井崇弘, 2022, 単著, 『福井大学教育・人文社会系部門紀要』第6号, 1-10頁)は、2019年度の底本と翻訳者、翻訳背景についての考察と2020年度の訳語(語彙)に関する研究成果をふまえ、文法的観点から考察を行ったもので、ここでは口語の標識である「的」と「了」の『嘉音遵囑口挑菩薩之語』における用法を分析・考察し、全体的に文語的な漢訳文に口語的要素の混在を確認するとともに、それが広東語に由来することを明らかにした。また、この現象は1810年のマーシュマン・ラサール訳では消え、1822年のマーシュマン・ラサール訳では方言語彙としてではなく、白話語彙として「的」と「了」を混入していることを指摘することができた。

2022年度でも2021年度に引き続き、文法的観点から研究を行った。論文「ラサール訳《嘉音遵囑口挑菩薩之語》における並列関係を示す連詞の用法について」(永井崇弘, 2023, 単著, 『関西大学中国文学会紀要』第44号, 1-15頁)では、1807年のラサール訳における並列の連詞の特徴を使用頻度・順序から考察を行い、その特徴を解明した。これにより連詞1つのみの使用では、概ね「兼」を使用していること、また複数を同時に使用する場合、第1連詞には「兼」を使用し、次に「兼₁」「及₁」「與₁」「並」を使用するが、「又」は使用しないこと、3つを使用する場合は「兼+及+兼」の順序と組合せが、5つの連詞の使用では「兼+與+及+並+又」の順序と組合せが存在していた。またこれらの用法が中国語母語話者の作品とは異なることも明らかにした。

本研究課題の最終年度となる2023年度の主な研究成果として、2022年度第5回KU-ORCAS研究例会(言語交渉研究班)(第7回関西大学東西学術研究所研究例会)での口頭発表をもとにした「拉沙漢譯聖經諸譯本之人稱代詞」(永井崇弘, 2024, 単著, 『関西大学中国文学会紀要』第45号, 19-30頁)が挙げられる。この論文は、語彙・文法に関する研究である。ラサール訳を出発点としてマーシュマン・ラサール訳の4種の版本およびモリソン訳における人称代詞を考察し、各版本における人称代詞の種類と使用頻度から優先使用順序などの特徴を明らかにするとともに、ラサール系漢訳聖書における人称代詞の変遷を解明した。特に1807年のラサール訳における広東語の「我的」の使用と1813年版における二人称複数を示す「爾們」の使用を確認したことは、各版本の各種人称代詞の優先使用順序の解明に加えて、ラサール訳およびマーシュマン・ラサール訳における言語的特徴の発見であるとともに、書誌情報のない版本を特定する際に重要な指標となることを示すことができた。

以上の主要な研究成果からも、翻訳者、翻訳背景、底本など書誌的観点からの研究、語彙と文法の観点からの研究、共時・通時的な研究といった総合的な研究を行うことができ、これまで手つかずであったラサール系漢訳聖書の輪郭をおおよそ明らかにすることができた。また、これまでの本研究課題に関連する研究成果から、ラサールが漢訳に関与したラサール系漢訳聖書の訳語・訳文は大きく1804~1807年版、1810~1813年版、1815~1822年版の3期に分けることができ、はラサール単独での漢訳、とはマーシュマンがラサールとともに共訳したもので、マーシュマンが参与した期では期の訳語・訳文の影響が薄れ、期になると期とは大きく異なる訳語・訳文となり、モリソン訳の影響を大きく受けているという知見も得た。

文献調査については、本課題研究期間において当初その発見を期待していた1816年は発見に至らなかったが、1807年、1810年、1813年をランベス・パレス図書館、大英図書館、オックスフォード大学図書館で発見するとともに、1813年のマーシュマン・ラサール訳の旧約(部分)をインドのセランプル・カレッジにあるカレー博物館の書庫で発見することができた。これら本研究課題の遂行で新たに発見した漢訳聖書および近代中国語文献と既に入手済みの1822年を用いて、英国のインド統治、フォート・ウィリアム・カレッジ、セランプルでの宣教活動、漢訳聖書の翻訳背景、ランベス本がロンドンに所蔵される経緯など翻訳に関連する知見も得ることができ、漢訳文における語彙・語法の研究に深みを増すことができた。

これらの研究成果の学術的な公表に加えて、本課題研究課題の内容を積極的に広報することができた。2020年度では本研究課題に関連する内容を「内閣府/総合科学技術基礎調査委託関連事業の『こんな研究をして世界を変えよう』研究紹介記事」(みらいぶっく事務局, 2021年2月19日~公開, <https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/12778/>)を通して、その意義と研究内容を中高生をはじめ、社会一般にもWebを通じて広く広報することができた。また本研究課題に関連する一般の方々からの質問をJ-GLOBALなどを通じて2件頂き、それぞれ回答を行うこともできた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 第44号
2. 論文標題 ラサール訳《嘉音遵口罵口挑菩薩之語》における並列関係を示す連詞の用法について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関西大学中国学会紀要	6. 最初と最後の頁 1, 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 第6号
2. 論文標題 關於拉沙漢訳《嘉音遵口罵口挑菩薩之語》“的”與“了”的用法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩山正純	4. 巻 第27期
2. 論文標題 明清時期西洋人“官話”描述演變史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北京外国語大学《國際漢學》	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 単行本
2. 論文標題 關於在印度漢訳的新教最早期聖經中基督教的詞語 1807年拉沙漢訳的《嘉音遵口罵口挑菩薩之語》爲中心	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文化交渉と言語接触』（内田慶市教授退職記念論文集），東方書店	6. 最初と最後の頁 213-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 第42号
2. 論文標題 關於1807年拉沙漢譯的《嘉音遵口罵口挑菩薩之語》中的首見漢字	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学中国文学会紀要	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩山正純	4. 巻 第1輯
2. 論文標題 从倪戈氏《耶穌教官話問答》窺看十九世紀中葉的“官話” 兼論与《古新聖經問答》一書的比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 《國際漢語教育史研究》, 商務印書館	6. 最初と最後の頁 62-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩山正純	4. 巻 単行本
2. 論文標題 時間表現の異文化翻訳 早期漢訳聖書から文理訳聖書そして官話訳聖書まで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文化交渉と言語接触』(内田慶市教授退職記念論文集), 東方書店	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 4号
2. 論文標題 關於于19世紀初在印度翻譯的漢譯聖經及其譯者和底本-拉沙的馬太福音漢譯本-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永井崇弘	4. 巻 45
2. 論文標題 拉沙漢譯聖經諸譯本之人稱代詞	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 関西大学中国文学会紀要	6. 最初と最後の頁 19, 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩山正純	4. 巻 52
2. 論文標題 『天路歷程』官話版にみる十九世紀後半から二十世紀初頭の官話の一端	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』	6. 最初と最後の頁 29, 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 永井崇弘
2. 発表標題 最早期プロテスタント系漢訳聖書における人稱代詞について
3. 学会等名 2022年度第5回KU-ORCAS研究例会 (第7回東西学術研究所研究例会) - 言語交渉研究班 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 宣教師ネヴィアス夫人による中国語に関する記録について
3. 学会等名 2022年度第3回KU-ORCAS研究例会 (第4回東西学術研究所研究例会) - 言語交渉研究班 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 近代在華欧美女学者的“官話”觀 以海倫·倪維思的回憶錄為主
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会第13回年次大会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 The words of time in Chinese Bible 漢訳聖經中的時間表現
3. 学会等名 EACS2021 23rd Biennial Conference of the European Association for Chinese Studies（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 從倪維思夫人的著作窺看19世紀中葉在華欧美女学者的“官話”觀
3. 学会等名 世界漢語教育史研究学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永井崇弘
2. 発表標題 關於1807年拉沙漢譯的《嘉音遵口罵口挑菩薩之語》中的基督教用語
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会第12回年次大会（中国・鄭州大学）（オンライン開催）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 中西“時間”概念的接触 - 以早期漢訳、文理訳及官話訳聖經中的時間表現爲中心 -
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会第12回年次大会（中国・鄭州大学）（オンライン開催）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 漢訳聖書における異文化翻訳 早期漢訳・文理訳・官話訳の時間表現を例に
3. 学会等名 中国近世語学会2020年度研究集会「小特集・漢訳聖書研究の現在」（関西大学）（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 関于西洋学者對漢語介詞的分析 - 管窺19世紀上半葉西洋学者漢語詞類認識進程 -
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会第11回年次大会（独・エアランゲン大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 基督敎問答書の文体 - 以楊格非的兩種《真道入門問答》爲例 -
3. 学会等名 語言接触与文化变遷國際學術研討會暨世界漢語教育史研究学会第11屆年會（北京外國語大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩山正純
2. 発表標題 近代西洋伝教士の中文“文体”観簡析-以楊格非の漢譯爲例-
3. 学会等名 四百年來東西方語言互動研究-第二屆近代東西語言接觸研究學術會議(2019)(北京外國語大學)(國際學會)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 永井崇弘・塩山正純	4. 発行年 2021年
2. 出版社 株式会社あるむ	5. 総ページ数 379
3. 書名 ラサール訳『嘉音遵口罵口挑菩薩之語』-研究と影印・翻刻- (愛知大学国研叢書第4期第5冊)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「こんな研究をして世界を変えよう」 https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/12778/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	塩山 正純 (Masazumi SHIOTAMA) (10329592)	愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授 (33901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------